洋０９－７０

「バンコック・デンジャラス」　　❀❀❀

２００９（平成２１）年４月１５日鑑賞＜ＧＡＧＡ試写室＞

監督：オキサイド・パン、ダニー・パン
製作：ノーム・ゴライトリー
ジョー（凄腕の暗殺者）／ニコラス・ケイジ
フォン（耳の不自由な女店員）／チャーリー・ヤン
コン（ジョーの助手）／シャクリット・ヤムナーム
オーム（クラブ・ダンサー）／ペンワード・ハーマニー
スラット（ジョーの依頼主、暗黒街の大物）／ニラティサイ・カルヤルーク
２００８年・アメリカ映画・１００分
配給／プレシディオ

＜政情不安のタイで、こんなタイトルの映画が！＞

タイでは、２００６年４月の下院選挙で民主党など主要政党がボイコットする中、タクシン・チナワット首相が率いる与党のタイ愛国党が大半の議席を占めたが、憲法裁判所が下院選挙無効の裁定を下し、やり直し選挙が模索される中、９月に軍部によるクーデターが発生した。そして、２００８年２月にサマック・スントラウェート内閣が成立して民政復帰するまで、軍事政権が続いた。

次にサマック首相の辞任後、タクシン氏の義弟であるソムチャーイが首相に就任したが、２００８年５月からは反タクシン派の市民団体である民主主義市民連合（ＰＡＤ）は、２００６年のクーデター以来の反政府運動をくり広げ、首相府を占拠するまでに至った。そして、２００８年１１月には、ＰＡＤがバンコックにあるスワンナプーム国際空港とドンムアン空港を占拠したため首都の空港機能が麻痺する事態となり、１２月にはソムチャーイ首相が退陣し、アピシット・ウェーチャチーワーが首相に就任した。

ところが２００９年４月の今、タクシン元首相を支持する市民団体「反独裁民主戦線」（ＵＤＤ）による抗議デモの高まりによってアピシット政権は圧迫され、ＡＳＥＡＮ（東南アジア諸国連合）関連首脳会議が中止される異常事態となった。アピシット首相が４月１２日に非常事態宣言を出したことによって、２人の死者と１３６人の負傷者を出したまま現在反政府デモはひとまず終息しているが、これほどまでに政情不安なタイはまさにデンジャラス。ゴールデンウィークの観光旅行の対象からも完全にはずされ、今後のタイの政治・経済運営は大変だ。

そんな時、タイムリーに、『バンコック・デンジャラス』なる邦題の本作が公開されることに。

＜プロの仕事は助手選びから＞

プロの殺し屋は孤独なもの、と相場が決まっている。また、プロの殺し屋として生き延びていくためには秘密の保持が不可欠だから、凄腕の暗殺者ジョー（ニコラス・ケイジ）が自分に課しているルールは、①質問するな、②堅気の人間と関わるな、③跡を残すな、④引き際を知れ、というもの。映画の冒頭、ジョーのナレーションでそんな孤独な暗殺者の心情が吐露されるが、仕事に不可欠な助手まで跡を残さないために殺されてしまうのだから、助手はたまったものではない。

他方、私が思うに、ルール①～③の遵守は比較的容易だが、最も難しいのがルール④。それは辞任すべきか、代表の地位に留まるべきかに揺れている（？）政治家小沢一郎の姿を見ても明らかだ。そう考えると、映画冒頭に登場するプラハでの「仕事」を見事に終えた後、彼が引き際を悟ったのは立派なもの。そして、彼が最後の仕事場として選んだのが、ギラギラしたネオンが目にまぶしく、欲望と野心が路上に転がっている猥雑な街というイメージで描かれているタイのバンコック。それはそれでいいのだが、同じ依頼主の暗黒街の大物スラット（ニラティサイ・カルヤルーク）からまとめて４件も請負うのはいかがなもの？

それはともかく、ジョーが最初に着手したのは、使い走り役をつとめてくれる助手探し。その条件は、①英語が話せて、②金で働き、③仕事を終えた後に良心の呵責を覚えることなく消してしまえる人物。いたいた、そんな男が。それが、観光客相手に商売をしながらスリを働くケチなチンピラのコン（シャクリット・ヤムナーム）だ。ギャラについてちょっとした駆け引きがあったものの、商談は無事に成立したが、意外にコンはおしゃべりで質問ばかり。こりゃ、助手としてちょっとヤバイのでは？

＜凄腕の暗殺者には、人間味と人間性は無用の長物？＞

ジョーがこれまで１００％仕事を成功させてきたのは、ジョーが人間味や人間性を捨てて非情となり、プロの殺し屋に徹してきたため。ところが、オキサイド・パンとダニー・パン兄弟が『レイン』（９９年）をリメイクしたという本作で、ジョーは、やけに質問が多く、仕事でもチョンボするコンを、自分の若い頃の目に似ているというだけの理由で殺さない（殺せない）という綻びを見せる。それが本作の第１のミソだ。そのうえ、ジョーはコンを自分の弟子として育てようとするのだが、これではジョーも焼きが回ったとしか言いようがないのでは？

さらに、凄腕の暗殺者にとっては本来人間味と人間性は無用の長物のはずだが、本作ではジョーと耳の不自由な薬局の女店員フォン（チャーリー・ヤン）との間の、何とも初々しいラブストーリーが展開していくのが第２のミソ。フォンは『香港国際警察』（０４年）や『ＳＥＶＥＮ　ＳＷＯＲＤＳ　セブンソード（七剣）』（０５年）で私が観た香港の美人女優だが、耳の不自由な役のためセリフなしの演技に挑戦し、同じく他人との対話が苦手なジョー（？）と心を通わせていく。かなりいい線までいっていた２人の恋模様が破綻するのはナゼ？それはあなた自身の目で観てもらいたいが、大変な仕事を引き受けているのに、フォンと食事したりデートしたりして、ジョーはホントに大丈夫？『００７』シリーズ２１作、２２作のジェームズ・ボンドは女に対する価値観が転換したようだが、凄腕の暗殺者で助手を使い捨てにするジョーとしては、かつてのジェームズ・ボンドのように「女は使い捨て」と割り切った方がいいのでは？

まあ本作は、ジョーが助手と女の２点において人間味と人間性を発揮し始めたのが、想定外の結果を生んだ最大の原因。やはり、凄腕の暗殺者には人間味や人間性は無用の長物？

＜最後は政治家。それが問題？それとも？＞

『ジャッカルの日』（７３年）はドゴール大統領の暗殺を狙う暗殺者ジャッカルの闘いを描いたすばらしい映画だったが、ジョーが最後の仕事として請負ったターゲットは政治家。闇に埋もれている悪人たちの暗殺と違い、政治家の暗殺は警備が厳重で国家権力を敵に回すのだからリスクが大きいのは当然。そのうえ、この政治家はコンの評価によっても国民的人気が高く、庶民の味方らしい。

もっとも、凄腕の暗殺者ジョーにとっては本来そんなことはどうでもいいはずだが、なぜかジョーはターゲットに向けて銃口を向けながら引き金を引くことに躊躇。ベストポジションから銃口を向けていてもその場で躊躇すれば、厳重な警備体制によって発見される危険が増大するのは当然。その結果、ジョーに向けて多数の銃弾が浴びせられたから大変。何とかその場を逃げ出すことができたが、なぜジョーはあの政治家の暗殺をためらったの？

そこらあたりが本作のポイントだが、ニコラス・ケイジはどんな渋い演技でそれを表現？

＜ここまで焼きが回っては・・・＞

「弘法も筆の誤り」と言うように、いくら完璧を誇る暗殺者であってもミスはあるはず。しかし、他の仕事ならともかく、暗殺者にとってはちょっとしたミスは即命取りのはず。今ジョーが犯した過ちは、引き金を引くのを躊躇したこと。そのミスをカバーして生き延びるためには、１日も早くこの国から出国することだ。そのためのパスポートの準備などは完璧だから、今はただそれに突っ走るだけ。それが凄腕の暗殺者のとるべき行動だが、ジョーは今自分を襲ってきた暗黒街の大物スラットとの対決を選ぼうとしているようだ。

スラットがジョーの隠れ家を襲ったのは、助手のコンとコンが懇ろにしていたクラブ・ダンサーのオーム（ペンワード・ハーマニー）を監禁し、ジョーの居場所を自白させたため。したがって、当然コンとオームはスラットに捕らえられているわけだが、１つの仕事が終われば助手を始末してきたジョーにとっては助手の命などはどうでもいいこと。しかるに、今ジョーがとろうとしている行動とは？

ここまで焼きが回っては・・・。

２００９（平成２１）年４月１７日記